◎向日市民憲章◎
1　住みよいまちを力を合わせつくりましょう
1　きれいな緑と水と空を守りましょう
1　働くよろこびと心のふれあいを大切にしましょう
1　すぐれた教育と文化を育てましょう
1　明るいくらしと福祉のまちをきずきましょう

広報向日市

No.608
平成7年（1995年）10月15日
◎発行　向日市役所（京都府向日市寺戸町中野20）
◎編集　秘書広報課　◎電話　075(931)1111

中海道遺跡から出土

卑弥呼時代の祭殿跡!?

このほど、中海道遺跡（物集女町ヲサン田）で、庄内期の政治拠点施設の一つとみられる建物跡が出土しました。庄内期は邪馬台国の時代であり、その時期の首長の建物が発見された例はこれまでなく、㈶向日市埋蔵文化財センターでは、きわめて重要な資料と評価しています。

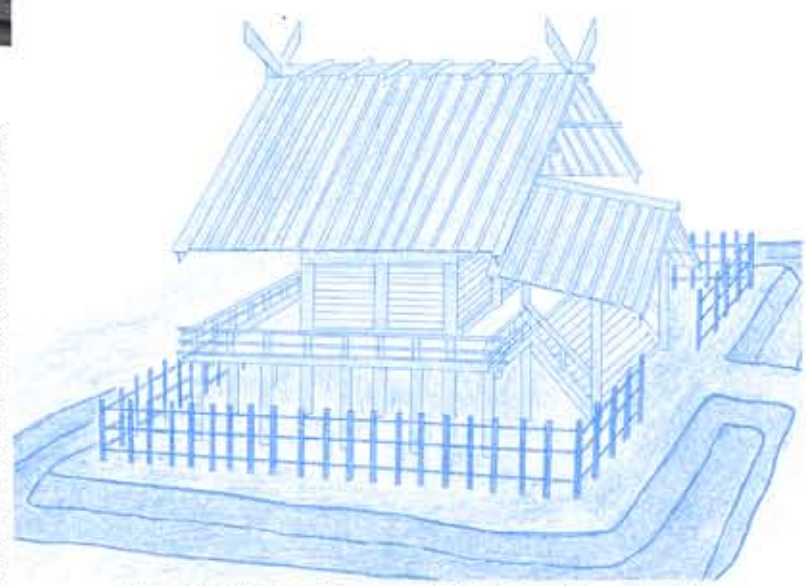
中海道遺跡から出土した祭殿とみられる建物跡

9月23日に行われた現地説明会には、全国から約1,000人のファンが詰めかけました

中海道遺跡は、弥生時代中期から古墳時代前期までの乙訓地域を代表する拠点集落です。今回、出土した遺構は、竪穴住居6棟、堀立て柱建物1棟、小柱穴群と溝があります。特に、方形にめぐる溝によって囲まれた堀立て柱建物は、中海道ムラと近隣のムラを統括した首長の政治拠点施設の一つとみられています。庄内期の首長の建物が発見された例はこれまでありません。

建物は、四方に四間の柱列が並んでおり、身舎（もや）は南北に2間（約5・5m）、東西に2間（約5m）で、庇（ひさし）を含めると南北に4間（8・6m）、東西に4間（約8m）の規模を持つもので、その床面積は約68・8㎡になります。柱穴は直径80～90㎝を測り、ほぼ方形をしています。柱は直径約30㎝で、重複する柱穴や柱の抜き取り跡がないことから建物の建て替えはなかったものと考えられます。また柱部分に焼土と炭が多量に分布していることから建物は、火災によって焼失した可能性が想定できます。

この建物の性格・機能については、高殿ないしは祭殿のいずれかが想定されますが、周囲の住居群と溝で仕切られ、生活するには空間が狭いうえ遺物もないなど、非日常性が強い点で祭殿と評価するのが妥当と思われます。「祭殿」と評価した場合、こうした建築構造や方形区画溝の形態を持つものとしては、最古にして初めての発見といえます。



〔祭殿の推定復元図〕四方に縁を備えており、構造的に出雲大社の本殿と類似している

※庄内期…「魏志倭人伝」の記す邪馬台国の女王卑弥呼が、広範な政治的統合を展開していった時代であり、弥生時代終末期から古墳時代にかけての過渡期に位置づけられる時期区分。大阪府豊中市庄内遺跡から出土した土器（庄内式土器）を標識とし、その特徴を備えた土器が分布する段階を庄内期と呼ぶ。西暦250年前後と考えられる。

「祭殿」から古墳へ

～中海道遺跡と弟国（オトクニ）の王～

向日神社の境内を南の端とする丘陵（長岡）には、3世紀の終わり頃に造営が開始された元稲荷古墳を筆頭に、五塚原古墳・妙見山古墳・寺戸大塚古墳が並んでいます。それらを造った豪族がどこに住み、どんな暮らしをしていたかは謎に包まれていました。

中海道遺跡は、古墳ができる30年ほど前に発展した村の跡です。物集女の豪族は、人々が見たこともない神を祭る施設を造り、権力を誇示していたのです。当時の日本には邪馬台国があり、その女王・卑弥呼は神を祭って国を治めたといいます。当時の支配者には「祭殿」が欠かせなかったようです。その後全国を統一した大和朝廷は、祭殿の代わりに前方後円墳をシンボルとします。物集女の豪族は、弟国を治める王となり、子孫が丘陵上に古墳を造ったと考えれば謎も解けます。

㈶向日市埋蔵文化財センター長
山中　章